

ディルムンを掘る

—バハレーン、ワーディー・アッ＝サイル考古学プロジェクト 2023—

安倍 雅史	東京文化財研究所文化遺産国際協力センター保存計画研究室長
岡崎 健治	鳥取大学助教
庄田 慎矢	奈良文化財研究所企画調整部国際遺跡研究室長
佐々木蘭貞	帝京大学文化財研究所准教授
山本 遊児	水中文化遺産写真家
山田 綾乃	東京文化財研究所アソシエイトフェロー
長尾 琢磨	東京文化財研究所研究補佐員
鈴木 崇司	駒澤大学大学院

Archaeological Research on Dilmun: the Bahrain Wadi al Sail Archaeological Project 2023

ABE, Masashi	Head, Conservation Design Section, Japan Center for International Cooperation in Conservation, Tokyo National Research Institute for Cultural Properties
OKAZAKI, Kenji	Assistant Professor, Tottori University
SHODA, Shinya	Head, International Cooperation Section, Planning and Coordination, Nara National Research Institute for Cultural Properties
SASAKI, Randy	Associate Professor, Research Institute of Cultural Properties, Teikyo University
YAMAMOTO, Yuji	Underwater Cultural Heritage Photographer
YAMADA, Ayano	Associate Fellow, Tokyo National Research Institute for Cultural Properties
NAGAO, Takuma	Research Assistant, Tokyo National Research Institute for Cultural Properties
SUZUKI, Takashi	Komazawa University Graduate School/Ph.D student

1. はじめに

ディルムンは、メソポタミアの文献史料に登場する周辺国の一つである。この王国は、前2千年紀前半（前2000年～前1700年）に、南メソポタミアとオマーン半島、インダスを結ぶペルシア湾の海上交易を独占し繁栄した。現在、ペルシア湾に浮かぶバハレーンが、ディルムンに比定されている（図1）。ディルムンの繁栄ぶりを示すのが、バハレーンに残されている無数の古墳である（図2）。最新の研究によれば、バハレーンには前2300年から前1700年にかけて7万5千基もの古墳が築造されたという。

この古墳のなかで、とくに興味深いのが「子持ち古墳」と呼ばれる古墳である（図3）。子持ち古墳とは、主要な古墳に小古墳が一つあるいは複数付随した古墳のことである。

子持ち古墳は、1970年代後半にサール古墳群で初めて確認された。そして今世紀に入り、B・フローリッヒらが総合的な研究を実施し、子持ち古墳の主要古墳には16歳以上の成人が、子持ち古墳の小古墳に

は15歳以下の未成年が埋葬されていることを明らかにした。現在、子持ち古墳は、家族墓として解釈されている。ディルムンでは、15歳前後が成人とみなされる年齢であったようだ。成人すると古墳を造ることが許され、いずれ迎える死に向けあらかじめ古墳を築造した。その後、結婚して子供が生まれ、その子供が病気や不慮の事故で亡くなると、自分の古墳の傍らに急ぎ子供を埋葬するための小古墳を造ったと考えられている。

しかし、バハレーンでは一般的に人骨の残存状態が悪く、子持ち古墳に関しては、「本当に家族墓なのか?」、「家族墓ならば、子持ち古墳に埋葬されたのは父親と子供だったのか、あるいは母親と子供だったのか?」など、基本的な問題すら明らかにされていない。そこで、私たちは、現在、フィルードとするワーディー・アッ＝サイル古墳群で、子持ち古墳を集中的に発掘している。ここでは、2023年の1月、2月に実施した第7次調査の成果を中心に報告する。

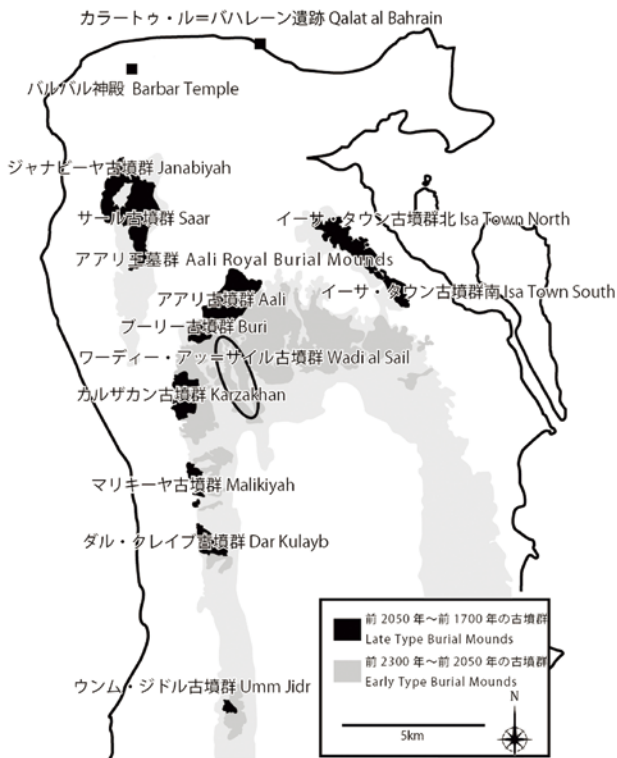


図1 バハレーンに残されたディルムン関連の遺跡

2. ワーディー・アッ=サイル古墳群の第7次調査

2.1. ワーディー・アッ=サイル古墳群

バハレーンには、11のディルムンの古墳群が存在する(図1)。古墳群は、ディルムン形成期(前2300年～前2050年)のものと、文明期(前2050年～前1700年)のものに区分される。形成期の古墳と文明期の古墳とは、築造方法や立地、密集度に大きな違いがあることが知られている。筆者たちが2015年から発掘しているワーディー・アッ=サイル古墳群は、バハレーンに唯一現存するディルムン形成期(前2300年～前2050年)の古墳群である。

ワーディー・アッ=サイルは、内陸台地を南から北へと流れる全長4kmほどの涸れ川である(図4)。この涸れ川の上流3kmの両岸に数百期の古墳が分布している。古墳群が広大なため、筆者たちは、古墳群の北東部(北東調査区)を中心に発掘調査を行っている。

2.2. 47号墓(図5)

47号墓は、発掘を実施する前、南側と東側、西側に大きく膨らんでいた。そのため子持ち古墳と想定された。しかし、発掘の結果、マウンドが大きく崩れているだけで、47号墓は小古墳を伴わない単独の古墳



図2 カルザカン古墳群



図3 典型的な子持ち古墳(タイプ1。上が北)

であることが判明した。

古墳の直径は4.8m、高さは75cm程度であった。古墳の中央からは、長軸160cm×幅125cmの石室が検出された。石室床面直上からは、成人の骨が検出された(図6)。人骨は、頭を東、足を西、顔を北に向け、屈葬されていた。しかし、人骨の残存状態はきわめて悪く、取り上げは困難をきわめた。

石室内からは副葬品は検出されなかったものの、人骨の顔の北側および背中側の南側の範囲より、ヒツジ/ヤギと思われる動物骨が出土した。

2.3. 49号墓と48号墓の発掘

49号墓も、発掘前、古墳が大きく南側に膨らんでいた。そのため、子持ち古墳と想定された。発掘の結果、49号墓の南側に接するように49-S1号墓と49-S2号墓の二つの小古墳が検出された(図7)。この

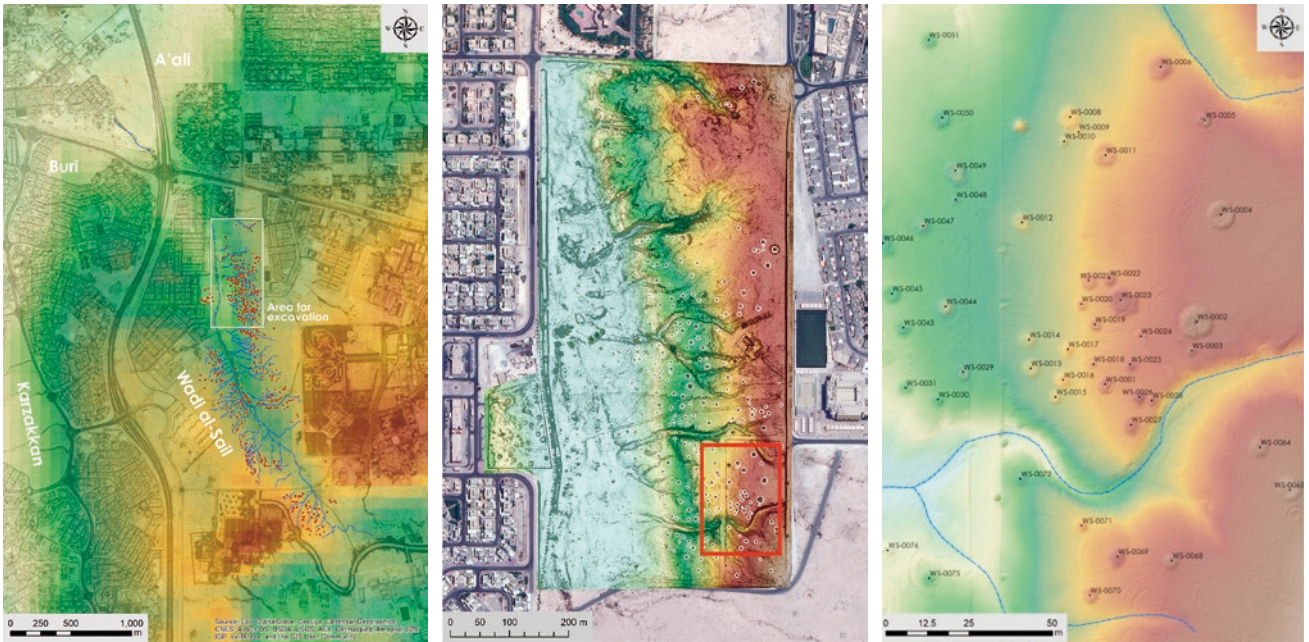


図4 ワーディー・アッ=サイル古墳群(左)と北東調査区(中)と本稿で言及する古墳が位置する箇所(左、北東調査区の南東)



図5 47号墓



図6 47号墓出土人骨

ような子持ち古墳は従来知られてきた子持ち古墳と同じで、タイプ1と呼んでいる。なお、今までの調査で、タイプ1の小古墳には、乳児／幼児が埋葬されていたことがわかってきている。

さらに、49号墓から南に2.5m離れたところにも、小さな古墳48号墓が存在した(図8)。この48号墓もあわせて発掘したところ、この古墳も49号墓に付随する小古墳であると結論付けられた。このように、主要古墳の南側少し離れたところに小古墳を造るタイプの子持ち古墳は、私たちの調査ではじめて確認されたもので、タイプ2と呼んでいる。なお、タイプ2の小古墳にも、乳児／幼児が埋葬されていることが私たちの調査からわかってきている。

49号墓、49-S1号墓、49-S2号墓、48号墓のコンプレックスは、タイプ1とタイプ2が混ざったもので

あり、主要古墳に全部で三つの小古墳が付随したものである。

49号墓は、直径が6.2mで、中央からt字形をした石室が検出された。石室は、東西155cm×南北300cmであった。人骨は検出されなかったものの、石室の大きさから成人が埋葬されたものと推定された。石室からはヒツジ／ヤギと思われる獣骨のほか、インダス産の紅玉髄ビーズ1点や化粧入れと思われる二枚貝が3点、そのほか巻貝が1点出土した。

49-S1号墓は、直径が1.8m、中央からは長軸70cm×幅30cm×高さ30cmの小さな石室が検出された。石室からは人骨は出土しなかったものの、緑色顔料をおさめた二枚貝が1点出土した。

49-S2号墓は、直径が2.4m、中央からは長軸90cm×幅55cm×高さ40cmの石室が検出された。



図7 49号墓(主要古墳)と49-S1号墓(左の小古墳)、49-S2号墓(右の小古墳)(南側より撮影)



図8 49号墓、49-S1号墓、49-S2号墓と48号墓(北側から撮影)49号墓の南側、奥にうつつているのが48号墓である。

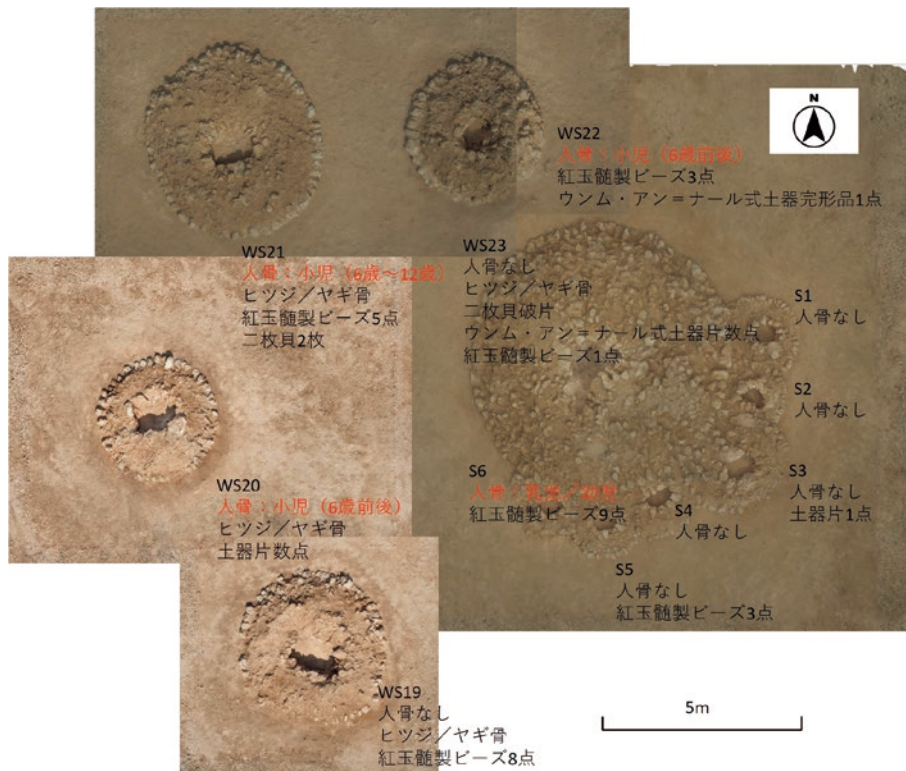


図9 23号墓を中心としたコンプレックス

石室からは人骨は出土しなかったものの、土器の小片が2点出土した。

48号墓は、直径が2.2 m、中央からは長軸98 cm×幅60 cm×高さ45 cmの楕円形の石室が検出された。石室からは人骨は検出されなかったものの、丸底の土器また複数の二枚貝が出土した。

49-S1号墓、49-S2号墓、48号墓からは、いずれも人骨は出土しなかった。しかし、いままでの事例と石室の大きさから(実験の結果、小児を埋葬するには、長さが1 m以上の石室が必要)、いずれも乳児／幼児

を埋葬したものと思われる。

2.4. 19号墓、20号墓、21号墓、22号墓、23号墓

このコンプレックスは、ディルムンの葬制を考えるうえで、きわめて貴重である(図9)。そのため、第6シーズン(2020年)と第7シーズン(2023年)の2回のシーズンにわたって、このコンプレックスに属するすべての古墳を発掘した。第7シーズンでは、19号墓、20号墓を発掘したが、ここでは、コンプレックス全体の概要を述べたい。

このコンプレックスの中心にあるのが、23号墓である。23号墓は、直径が7.2m、中央にL字形の石室を持ち、石室の大きさは、長軸180cm×短軸150cmであった。残念ながら人骨は出土しなかったものの、石室の大きさから成人を埋葬したと思われる。

この23号墓は、タイプ1の子持ち古墳であり、南側に接するように23-S1号墓、23-S2号墓、23-S3号墓、23-S4号墓、23-S5号墓、23-S6号墓の計六つの小古墳が造られている。これらの小古墳は直径が2m前後と小さく、石室の長軸の長さもいずれも1m以下のため、乳児／幼児を埋葬したと推定された。また、実際に23-S6号墓からは、乳児／幼児のものと思われる頭骨片が出土している。

一方、23号墓の西側には、23号墓を弧状に取り囲むよう、中型の古墳4基、22号墓、21号墓、20号墓、19号墓が並んでいた。当初、直径が3m～5mのため、私たちは、この4基を成人の墓と想定していた。しかし、発掘の結果、4基中3基(22号墓、21号墓、20号墓)から6歳～12歳ごろの小児の人骨が出土した。そのため、現在、これら4基はいずれも小児を埋葬したものであり、23号墓に付随する小古墳であると考えている。このようなタイプの子持ち古墳は、いままで知られておらず、私たちはタイプ3と呼んでいる。

この23号墓を中心としたコンプレックスは、ディルムンの葬制を考えるうえできわめて重要である。まず、従来、ディルムンの古墳群は、15歳以下の未成年と16歳以上の成人という2区分で考えられてきた。しかし、未成年に関しても、6歳前後で葬制が大きく変わることがわかってきたのだ。このコンプレックスでは、おそらく乳児／幼児は主要古墳である23号墓の南側に隣接した小古墳に埋葬され、一方、小児は、23号墓の西側に弧状に配置された中型の古墳に埋葬されているようだ。ディルムンの社会において、6歳前後という年齢が人生のステージを分ける重要な年齢だったと推定される。

また、もし子持ち古墳が従来言われているように家族墓ならば、23号墓の被葬者は、生前10人もの子供を失ったことになる。16歳以上の成人まで生き抜いた子供も含めれば、本来、子供が、数十人いた可能性がある。そのため、主要古墳には父親が埋葬されており、ディルムンの社会は一夫多妻制だったと解釈するのが一番妥当な仮説ではないかと現在考えている(もちろん子どもさんの女性が埋葬されている可能性もある)、今後の検討課題である。

3. おわりに

第7シーズンでは、ワーディー・アッ＝サイル古墳群の発掘調査のほか、日本を代表する水中考古学者である佐々木蘭貞博士が中心となり、水中考古学調査も実施した。この水中考古学調査の成果に関しては、別途、報告したいと考えている。

2023年度も、子持ち古墳の解明に向け、ワーディー・アッ＝サイル古墳群の発掘調査を実施する予定である。

謝辞

第7次調査を実施するにあたり、金沢大学の藤井純夫先生、バハレーン文化古物局のハリーフア・アハメド・アル・ハリーフア王子(H.H. Shaikh Khalifa Ahmed Al Khalifa)、ピエール・ロンバル博士(Dr. Pierre Lombard)またサルマン・アル・マハリ博士(Dr. Salman Al Mahari)から多大なご支援、ご協力を賜った。この場を借り、感謝を申し上げたい。なお本プロジェクトは、科研費基盤研究(S)「中東部族社会の起源：アラビア半島先原史遊牧文化の包括的研究」(研究代表者：藤井純夫、研究課題／領域番号：19H05592)によるものである。

参考文献

- ・ Abe, M. and A. Uesugi 2021 Reconsidering the Date of Riffa Type Burial Mounds in the Early Dilmun Period: New Radiocarbon Data from Wadi al-Sail, Bahrain. *Al-Rafidan* 42: 75-85.
- ・ Frohlich, B. and D. Ortner 2000 Social and Demographic Implications of Subadult Inhumations in the Ancient Near East. In: Stager, L. E., Greene, J. A. and M. D. Coogan (eds), *The Archaeology of Jordan and Beyond*, 122-132. Winona Lake, Eisenbrauns.
- ・ Gotoh, T., Saito, K., Abe, M. and A. Uesugi 2020 Excavations at Wadi al-Sail, Bahrain 2015-2019. *Proceedings of the Seminar for Arabian Studies* 50: 169-186.
- ・ Laursen, S. T. 2017 *The Royal Mounds of A'ali in Bahrain*. Aarhus, Aarhus University Press.
- ・ 安倍雅史 2017a 「バハレーンに栄えた古代文明ディルムンの考古学」『文化遺産の世界』<https://www.isan-no-sekai.jp/column/20170426-2>
- ・ 安倍雅史 2017b 「ディルムンの起源と専門化の発展」『Waseda RILAS Journal』5号 482-484頁。
- ・ 安倍雅史 2019a 「真珠、石油、古墳の国 バハレーンへの国際協力事業(I)：古墳群の保存・活用・史跡整備に関するスタディー・ツアー」『文化遺産国際協力コンソーシアム Web Page 文化遺産コラム 文化遺産国際協力のいま』<https://www.jcic-heritage.jp/column/bahrain01/>
- ・ 安倍雅史 2019b 「真珠、石油、古墳の国 バハレーンへの国際協力事業(II)：日本隊による学術調査と新発見」『文化遺産国際協力コンソーシアム Web Page 文化遺産コラム 文化遺産国際協力のいま』<https://www.jcic-heritage.jp/column/bahrain02/>

- ・安倍雅史 2020「バハレーンに栄えたディルムンの考古学—ディルムンをめぐる最新研究動向」『You Tube 日本西アジア考古学チャンネル 西アジア考古学オンライン講義』
- ・安倍雅史 2021「第6章バハレーン ワーディー・アッ=サイル古墳群—ディルムンの起源を探る」清岡史(聞き手・編)『オリエント古代の探求—日本人研究者が行く最前線』135-156頁 中央公論新社。
- ・安倍雅史 2022a「謎の海洋王国ディルムンを掘る」『文化遺産の世界』<https://www.isan-no-sekai.jp/column/8744>
- ・安倍雅史 2022b『謎の海洋王国ディルムン—メソポタミア文明を支えた交易国家の勃興と崩壊』中公選書。
- ・安倍雅史 2022c「ディルムンを掘る—バハレーン、ワーディー・アッ=サイル考古学プロジェクト—」『第29回西アジア発掘調査報告会報告集』70-74頁 日本西アジア考古学会。
- ・安倍雅史・上杉彰紀・西藤清秀・後藤 健 2017「ワーディー・アッ=サイル古墳群から見た古代ディルムンの系譜」『西アジア考古学』第18号 1-15頁 日本西アジア考古学会。
- ・安倍雅史・上杉彰紀・岡崎健治・佐々木蘭貞・間舎裕生 2021「ディルムンを掘る—バハレーン、ワーディー・アッ=サイル考古学プロジェクト2020—」『第28回西アジア発掘調査報告会報告集』85-88頁 日本西アジア考古学会。
- ・後藤 健 2015『メソポタミアとインダスのあいだ—知られざる海洋の古代文明』筑摩書房。
- ・後藤 健・西藤清秀・安倍雅史・原田 怜・濱崎一志・吉村和久・岡崎健治・上杉彰紀・杉山拓己・堀岡晴美 2016「古代ディルムン王国の起源を求めて—バハレーン、ワーディー・アッ=サイル考古学プロジェクト2015」『第23回西アジア発掘調査報告会報告集』114-120頁 日本西アジア考古学会。
- ・後藤 健・西藤清秀・安倍雅史・上杉彰紀・濱崎一志・吉村和久・岡崎健治・堀岡晴美・鈴木崇司・成田 竣 2017「古代ディルムン王国の起源を求めて—バハレーン、ワーディー・アッ=サイル考古学プロジェクト2016」『第24回西アジア発掘調査報告会報告集』94-99頁 日本西アジア考古学会。
- ・後藤 健・西藤清秀・安倍雅史・上杉彰紀・原田怜・岡崎健治・渡部展也・堀岡晴美 2018「古代ディルムン王国の起源を求めて—バハレーン、ワーディー・アッ=サイル考古学プロジェクト2017」『第25回西アジア発掘調査報告会報告集』72-76頁 日本西アジア考古学会。
- ・後藤 健・西藤清秀・安倍雅史・上杉彰紀・岡崎健治・堀岡晴美・原田 怜・間舎裕生・山口莉歩 2019「古代ディルムン王国の起源を求めて—バハレーン、ワーディー・アッ=サイル考古学プロジェクト2018」『第26回西アジア発掘調査報告会報告集』71-75頁 日本西アジア考古学会。
- ・後藤 健・西藤清秀・安倍雅史・上杉彰紀・岡崎健治 2020「古代ディルムン王国の起源を求めて—バハレーン、ワーディー・アッ=サイル考古学プロジェクト2019」『第27回西アジア発掘調査報告会報告集』80-84頁 日本西アジア考古学会。